

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載してください。 国立大学法人 宇都宮大学 大学院 教育学研究科
	事業名：「主体的・対話的で深い学び」を実現するための教師のリフレクションのあり方 －授業改善を通じた学校改善を目指して－
	研修等名：【NITS・宇都宮大学教職大学院コラボ研修】 「主体的・対話的で深い学び」を実現するための教師のリフレクションのあり方
	開催日時：令和6年12月14日 9時～12時 開催場所：国立大学法人宇都宮大学（栃木県宇都宮市峰町 350） 参加人数（総数）と参加者の属性：（67人）宇都宮大学教職大学院生 21人、栃木県内一般校 校長・教諭 23人、栃木県内教育委員会指導主事等 16人、宇都宮大学教員 7人

目的：

教員免許更新制の廃止を受け、研修履歴を活用した「対話」に基づく教員研修のあり方が問われている。児童生徒の個別最適な学び及び協働的な学びの充実を通じての「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、教師もまた「主体的・対話的で深い学び」を自らの研修の中でいかに実現していくかが課題になっているといえる。そのような文脈において、教師の「リフレクション」の意味や意義を再考し、日常的な授業改善から学校改善へとつながる研修のあり方を考えることが本事業の目的となる。

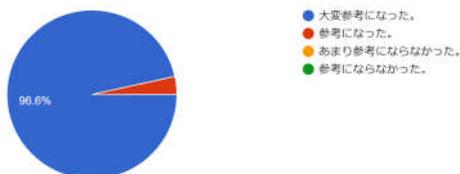
内容：

まず、研修当日は、参加者の所属校等における教職員のリフレクションの取組、あるいは関連する授業改善の取組について現状と課題をグループになり共有した。続いて、国立教育政策研究所 千々布敏弥氏から、『「主体的・対話的で深い学び」を実現するための教師のリフレクションのあり方』の講話を参加者全員で聴いた。千々布氏は、主体的・対話的で深い学びの実現には、「学習者」における学びの改善と「授業者」における授業の改善の両方の視点の「往還」が重要であると、さらに「授業改善」とは学校の組織文化や児童生徒の学力との関連の中で考えることが必要であると述べた。そのために教師は自らの主体性（エージェンシー）を發揮しつつ、批判的リフレクション（自らの実践の背景にある思想を把握し、それを見直す）を行う中で、学校現場における実践に影響を及ぼす「構造」について働きかけ、その「構造」自体を更新していくことの重要性を実際の学校改革の事例を交えて話をしてくださった。その後、講話内容について質疑応答、さらに参加者同士の話し合いが行われた。後日、「リフレクション」に関してさらに学びを深めたい教職大学院生を中心に、千々布氏の著作等を中心として文献講読を行い、教師のリフレクションのあり方について研鑽を深めた。

成果：※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載して下さい。

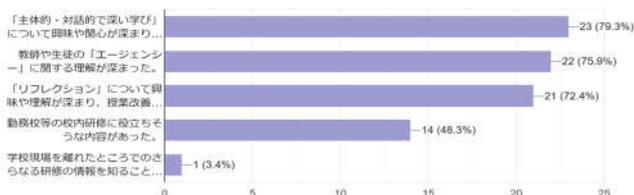
②本日の講演内容について、総合的な評価をお聞かせください。

29件の回答



③ ②で「大変参考になった」「参考になった」と...ではまる項目を選んでください（複数回答可）。

29件の回答



研修後、参加者にアンケートに協力するように依頼した（回答率48%）。まず、参加者に総合的な評価を4件法で尋ねたところ、「大変参考になった。」、「参考になった。」の合計が100%となった。参加者の満足度は高かったことがうかがえる。

次に具体的な項目について確認したところ、『「主体的・対話的で深い学び」について興味や関心が深まり、授業改善に取り組む意欲が高まった。（23件 79.3%）」、「教師や生徒の『エージェンシー』に関する理解が深まった（22件 75.9%）」、『「リフレクション」について興味や理解が深まり、授業改善に取り組む意欲が高まった（21件 72.4%）」といった項目が上位に挙げられていた。

参加者の声（自由記述）としては、以下のようなものがあった。「『主体的・対話的で深い学び』が何を目指しているのかを明確に示してくださり、理解が深まりました。さらに『エージェンシー』と『主体性』との関連は、安易に学校現場で使われている現状に警鐘を鳴らしていただき、私自身もう少し掘り下げて校内で使っていこうと思います。やはり現場には「リフレクション」の文化を創っていくことが必要なのですね。」（中学校教諭）、「授業改善の基本的な考え方として、『トップがいいと思う考え方でやるのではなく、自分がどう考えて授業をつくっていくかがより重要』との言葉も改めて納得できるものでした。本町では学校ごとではなく町として研究を進めていますが、向かっていく手立てはそれぞれのよさを生かしそれぞれの学校が考えて取り組んでいる現在の取組を肯定していただけたようで励みになりました。それぞれが考え話し合いながら構造を変えていけるように助言していきたいと思います。」（町教育委員会指導主事）。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

本事業で実施した研修は、『研修観の転換』に向けた NITS からの提案（第 1 次）」において提言のある「参加者に醸成される『気付き』の中でも、自己の『在り方』への気付きが生まれることを意識しながら、参加者の『探究』を後押しする研修」（p.19）、すなわち「探究型研修」であると考え、「リフレクション」という概念と実践の再検討を通じて、これまでの自らの実践に思いを致し、教師としての自らの「在り方」や前向きな「探究」の契機となる場としたいことを願った。上記の参加者の感想等から、このようなねらいは一定程度達成できたものと考えられる。

アイデアや工夫したこと：



宇都宮大学教職大学院の「ホームカミングデー」企画と連動させることで、現役の教職大学院生に加え、教職大学院修了生が多く参加できるようにすること、またその勤務校の同僚の先生方を誘うように広報する等多くの意欲ある先生方が参加するように日程を工夫した（台風接近の影響もあり、参加者の安全を考慮し当初実施予定であった 8 月 31 日の開催を中止したため、スケジュールの再調整を行い、12 月 14 日に実施することとした。）。さらに栃木県教育委員会及び栃木県総合教育センターにも周知し、教育行政関係者及び指導主事が多く参加できるように企画し、教職大学院と行政機関の連携のあり方について検討できるように工夫した。

